

<書評>立石伯著 『石川淳論』

森島, 稔

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

44

(開始ページ / Start Page)

110

(終了ページ / End Page)

111

(発行年 / Year)

1991-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019634>

立石伯著

『石川淳論』

森島 稔

作家と作品を愛すること。この一見あたり前の文学者としての姿勢を、この『石川淳論』はまず私に思い出させてくれた。立石氏にならって思い起せば、私は思想を生き始める頃に頭デッカちな記号論や構造主義という取り巻きに溺死しかけていた。

石川淳に「敗荷落日」（昭和三十四年）という永井荷風追悼の文章がある。荷風論として、追悼の文章の範としてつとに名高い。そこに示されている慧眼と苛烈な作家精神のありように於て戦慄すべき文章だといふことができる。氏のエッセイのうちで特筆するにあたいする一篇である。私事に

わたることを寛恕してもらえば、三十年ほど前、私が石川淳という作家の存在を脳裡にはっきりと刻みこんだのはこの文章に於てである。『紫苑物語』と『修羅』とともに、私の脆弱な精神を見舞った荒々しい精神的事件とよぶにふさわしい一つの覚醒なのであった。

（『石川淳論』第一章）

氏十七歳の折の、これはおそらくは最初の文学上に起った精神の劇であった。その「覚醒」が、ここに氏の文体として根を据えたとい私は考える。ここで語られる石川淳の「敗荷落日」は、荷風という作家を、その精神の運動を、愛すが故にその作家の晩年の「精神の脱落」をその追悼に鋭い言葉で叱責せねばならなかった石川淳の精神の在り様をよく教えるエッセーだからである。ところで、氏にはこれ以前に三冊の作家論がある。『壇谷雄高の世界』『高橋和巳の世界』『武田泰淳論』である。どの作家もその精神のたたかひをよく見せてくれた人たちである。そしてこの三冊もまた、それぞれの作家の精神の在り様を教えてくれるものであった。私の浅学を棚上げ

し、礼を失して言ってしまう、しかし、その文章は晦渋という印象が私にはあった。日常触れ得る氏からは見ることでできないこの晦渋の印象は何処から来るのか、長年の不思議の一つであった。その答えはおそらく次の文の中にある。

∴。石川淳は仮構された「わたし」に自己を仮託することで自己自身の影を消去し、言葉のある魔力によって自己を無に等しいところまで追いつめることに成功した。そうすることによって、自己自身の現存を保証する仮定の空間を設定し、このなにもない無の空間に精神の力を作用させたのである。

（『石川淳論』第三章）

これ以前の晦渋の印象はつまり氏がその論ずべき作家と作品を愛するが故に、自己とその作家の精神の、言説上の齟齬に対する逡巡だったのではないだろうか。しかし、『石川淳論』には私の感じる限り、この逡巡はない。それは当然で、引用部の「石川淳」の所に氏の名を置きかえてみるといい。氏は石川

淳という精神の劇に氏自身を仮託することで石川淳と同様に、「自己自身の現存を保証する仮定の空間を設定し、このなにもない無の空間に精神の力を」自己のものとして語る事ができたからである。だからその「あとがき」で氏は平然と次のように述べる。

私は石川淳の文章は、全体が読まれるべきであると考えているために、暗示できる方法があれば、蕪雑なペンをむけて文章をだいたしにすくなくかつた。…(略)…また、たとえば『白頭吟』『至福千年』などの長篇小説、戯曲、夷齋のもの多く、古典の現代語訳、歌仙の遊戯などについて論じないで、どうして石川淳論か、ということになるかもしれぬ。博雅の士のそしりを甘受するしかない。

一見、謙虚と思えるこの「あとがき」の部分も、前述した観点を通してみる時、「それでも石川淳論なのである」とでも言っているような氏の評論家としての矜持を感じるのには深読みが過ぎるだろうか。

とまれ、この方法によって、作家と作品を

愛することとその批評との間の齟齬は取り払われることとなった。それは、いみじくも氏の最初の作家論『埴谷雄高の世界』の第一部の1「小説について」の扉に引用されているドストエフスキの次のことばに照応している。「単に事実を認識するのにさえ、一種の芸術家であることが必要なのである。」これに即して言ってみると、石川淳という事実を認識するのに、石川淳論という物語をした、とでも言えばよいか。この、自意識を自意識でもって確認するというような、表面的

には危く見える方法も、その確な方法論の裏付けによって、氏が文学の最重要課題の一つと考える「精神の問題の追究」(第八章)という作家論を新たに成立させることとなる。それは作家を一つの宇宙として見る方法でもある。このような、作家と作品を一つの総体として自律的に扱う評論が近年とみに減少していることをここで一言付け加えておきたい。

そして、もし、ここに一片の危惧があるとすれば、それはこの物語を成立させる「ことばの世界への絶対的信頼」(第五章)による現実と虚構の差延という問題である。しかし

これも、氏が「虚構を成立させる言葉の世界」に「沈黙者」という見えざる他者性の存在を第七章で意識している以上、私の杞憂に過ぎないであろう。

紙幅が尽きたが、最後に結論として、この著書は、作家論として、石川淳という小説家を総体として我々の前に開示するだけでなく、作家論という批評の一つの行き方を改めて教えてくれるのである。その意味でも、私や、作家研究を志す者にとって刺激の多い本である。

(オリジン出版センター刊)

四六判・二六七頁 三、〇九〇円

▽著者 文学部教授

▽評者 一九八七年大学院卒